

試験日 ： 2026 年 2 月 21 日（土）
入試種別 ： 大学院入学試験(4 月入学)修士課程 春期試験
学部・研究科： 心理学研究科
科目名 ： 専門科目

解答又は解答例

設問 I

1.

1) 視覚的断崖を用いた乳児の実験は、乳児が危険をどのように判断するかを調べるために行われたものである。ガラス板の下に深い段差があるように見える装置を用い、乳児がその上を渡るかどうかを観察する。多くの乳児は、母親の表情や声かけを手がかりに行動を決定することが示されており、ここで重要となるのが社会的参照である。社会的参照とは、乳児が不確実な状況に直面した際、養育者の情動表出を手がかりに行動を選択する現象を指す。実験では、母親が微笑むと乳児は渡ろうとし、逆に不安げな表情を示すと乳児は渡ることをためらう。このことから、乳児は単に視覚情報だけでなく、他者の情動を参照しながら環境を理解し、安全な行動を選択していることが明らかになった。

2) この知見を子育てに応用する際に重要なのは、子どもが大人の情動表出を通して環境の安全性や行動の方向性を学んでいくという点である。特に乳幼児期は、言語的説明よりも非言語的な情動表現が強い影響力を持つため、親が落ち着いた態度で状況を示すことが、子どもの安心感や探索行動を支える。

例えば、子どもが新しい遊具や初めての場所に不安を示す場面では、親が安心した表情で微笑みを浮かべ、穏やかな声で「大丈夫だよ」という情動的メッセージを伝えることで、環境を肯定的に捉えやすくなる。つまり、子どもは「安全である」と判断し、自信を持って行動できるようになるのである。一方で、親が過度に不安げな表情を見せると、子どもは危険を過大に評価し、新規の場面で挑戦する機会を失う可能性がある。

したがって、親は子どもの前での表情や態度に注意を払い、安心感や信頼を伝えることが大切である。このことが子どもの健全な探索行動や自立心の発達に寄与するの

である。また、子どもが困難に直面した際には、共感的なまなざしで見守りつつ、肯定的な反応を示すことで、子どもの情緒の安定と挑戦する意欲を育むことができる。このように、社会的参照の理解は、子どもの発達を支える温かな関わりの基盤となることを示し、日常的な親子の関わりの質を高める上で有益である。

2.

- a 信頼性 b 標準化 c 妥当性

設問Ⅱ

1

- 1) 人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程であり、ある個人にとってはリカバリーとは障害があっても充実し生産的な生活を送ることができる能力であり、他の個人にとっては症状の減少や緩和である。
- 2) 下記のような要因を通じてリカバリーを阻害する。
- ・メンタル・ヘルス関連のサービスとの接触を遅らせる
 - ・周囲の無理解により差別を受け、孤立を招く
 - ・アイデンティティや将来に対するネガティブな影響を与える

3) 正解：④

2.

1) 軽度認知障害 (mild cognitive impairment)

本人や家族に認知機能低下の自覚があるものの日常生活は問題なく送ることができる状態。1年で約5~15%が認知症に移行する一方で、約16~41%が健常な状態になることがわかっている。運動習慣の確立や年齢に応じた肥満・メタボ対策や、やせ・フレイル対策などでの予防が可能である。

2) ボーダーラインパーソナリティ症 (borderline personality disorder)

対人関係、自己像、感情などの不安定性および著しい衝動性の広範な様式で、成人期早期までに始まり、以下のような特徴がある。見捨てられ不安、スプリッティング、アクティング・アウト、同一性障害。適切な治療を受けると比較的予後は良好とされるが自殺のリスクは高い。特化した介入法としては、弁証法的行動療法がある。

3) 発達性協調運動障害 (developmental coordination disorder)

協調運動技能の獲得や遂行が、その人の生活年齢に応じて期待されるものよりも明らかに劣っている。その困難さは、不器用、運動技能、の遂行における遅さと不正確さによって明らかになる。完治は難しいが、作業療法や理学療法により生活上の困難を軽減することができ、自尊感情の低下といった二次障害の予防となる。

設問Ⅲ

1.

(1) ⑦

(2) ⑥

(3) ②

(4) ⑨

(5) ⑪

(6) ③

(7) ⑬

(8) ⑤

2.

(1) ×

(2) ×

(3) ○

(4) ×

(5) ○

設問Ⅳ

1.

1)

・SC だよりの発行

SC の来校日や存在そのものを知ってもらうために、子ども向けあるいは、保護者向けにたよりを発行する。子ども向けのたよりでは、まずは子ども達にスクールカウンセラーについて知ってもらうことが重要であり、不安や気になることがあるときに、気軽に相談に来てもらえるようなカウンセリングの紹介の文章を出します。また、保護者向けには、小中学生の子どもの心の特徴や悩みを抱えているときの対応についてお知らせします。具体的には、ストレスへの対応や思春期の気持ちの揺れなどを紹介したり、さまざまな不安を感じることは有りうることであり、そのような時に保護者がしっかりと話しくことの重要性や、場合によってはスクールカウンセラーに相談していただくような紹介の内容を伝えたりします。

・教員への研修会

夏休みや通常の授業期間における放課後等の時間を使って、教職員への心理学的な研修会を行っている。具体的には、子どもの心の理解や不登校、いじめへの対応、さらに発達障害の子どもの理解やリストカットの子どもの心理やその対応等について、心理教育的な視点からの話をしたりする。また、具体の子どもへの関わりとして、傾聴技法やカウンセリングマインドの姿勢、子どもがうまく言葉で表現できないときの話の聴き方など、カウンセリング的な対話の方法や関わり方などについて、体験的に学んで研修会等を行っています。

・会議等への出席

SC は勤務時間内の行われている会議等にも、積極的に参加することがあります。特に不登校や気になる子どもの情報を共有する不登校対策委員会や教育相談部会、また生徒指導部会などに、参加することがあります。そこでは、子どもたちのさまざまな現状が報告されるので、その中で気になった出来事や子どもの様子、発言などに対して SC としての見立てを伝えたり、さらには今度の支援の方向性や具体の関わり方等を提案する場合があります。また、実際には個々の子どもへの対応について関係する先生方集まって検討するケース会議等にも適宜出席して、助言を行うことがあります。

2) 文部省により 1995 年より始まったスクールカウンセラーの配置は、1 校に 8 時間、年間で 35 回が基本であった。初年度は、全国で 154 校からスタートし、年々配置校が増えていき、まず中学校への全校配置が進められた。次いで、高等学校への配置、小学校への配置と進んでいき、中学校においてはほぼ 100% の学校

に配置されている。高等学校もほぼすべての学校に配置されているが、小学校に関しては、都道府県によりまだばらつきがあり、3割程度のところから、8，9割に配置されるところまでである。

2.

1) 環境世界の意味や価値は人間の心の働きによって与えられるものではなく、環境世界が私たちに提供する（アフォードする）もの、すなわち環境世界に実在するものであるという考え方。

2) 文字の色を応える課題において、例えば赤い色で「青」と書かれていると、色名を応える速度が遅くなり、間違いも増える。これは、文字は無視して色だけ进行处理すべきであるが、文字情報の処理が自動化されているので、妨害効果が生じるということ。

3) 自分自身の思考（認知）を制御、モニター、評価することに関する認知である。具体的には「自分が考えていること」「感じていること」「判断しようとしていること」を客観的に観察し、必要に応じて修正する能力のこと